

編集後記

▼「いじめ」、不登校、中退等の問題は焦眉の課題となっています。新潟県は特に小中学生の「学校嫌い」による不登校が全国水準を大きく超えています。

ところが新潟県政は、教育条件の改善には依然として極めて消極的です。県単教員の数は、一九七四年には二二八人だったのが、八三年以降は四十人前後で推移し、九三年に四十七人に増やしたにすぎません。そのうち直接、児童・生徒を教える教員は十数名前後です。教育費の決算額構成比は、九三年二〇・〇％、九四年二〇・三％で、一九七五年の三二・〇％の三分の二にも及びません。

このような県の教育行政問題が、学校にどのように現われているかを明らかにしようとする努力をいたしました。

▼十一月二十七日、上越市立春日中学校一年生の伊藤準君が、学校における「いじめ」を苦にして自殺しました。それが（いじめ）「どれほど悪いことなのか分かっていないよ」うなので僕がぎせいになります」という遺書の内容は、わたくしたち大人の責任を追及し

ているように思います。遺書等は「資料室」に載せました。

▼「臨時教員問題とは何か」は、新潟県の教育行政の後進性をついた力作です。臨時教員に一月もの離職期間を定め、病気休暇もない実状はあまりにも知られていません。産休・育休を含まない本県の欠員に伴う臨時職員は小中学校で本年度（五月一日現在）は一五四人。その内訳は小学校五十五人、中学校八十四人、盲・聾・養護学校十五人で、昨年の三十九人、昨年の六十一人に比べ大幅に増えました。

▼内山雄平氏の「県内職業高校の再編と課題」は、タイムリーな論考。県産業教育審議会が八月に初の「工業教育のあり方」について中間まとめを提出し、県教委はそれを来年度以降の高校改革に反映しようとしています。

▼「日本海側は表日本だった」は、小、中、高校の歴史教育や環境教育の一助になればと願っています。

▼「ギャングエイジを経験し損った中学生たち」は、森拓人氏が子どもたちの現状を把握・分析し、それに働きかける試みがよく分かり、学校における実践報告が欲しいという要望に応えています。

▼関口荘六氏の「退職教員がなぜ三和村の村長になったか」は、激務のなかでの文章で、表題・小見出しとも編集部。「三和村の子どもたち」と併せてみて頂ければ幸甚です。

▼長田末作氏の「新潟県出身の満蒙開拓青少年義勇軍」は、戦後五十年のシリーズのひとつです。もっとも關の当たらなかった歴史の部分といえるでしょう。

▼「忘れえぬ人々」は、筆者の都合でしばらく休載しています。（吉田）

にいがたの教育情報 No.44

1995年11月30日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
新潟市東中通1-86 山崎ビル2F
〒951 電話 (025) 228-2924
振替口座・新潟 4-12332
印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。